

英語における指示NPの総称化現象に関する再検討*

松尾夏海

1. はじめに

次の(1)で、話し手から近い方のケーキをthis cake、遠い方をthat oneと指していることからわかるように、英語指示詞は一般にthis/thatの二つの区分から成っており、話し手から近い対象はthis、遠い対象はthatで指される。

- (1) Would you like to eat this cake or that one?

このように現場に存在する対象を指す用法は物理的指示用法として知られている。一方、物理的に現場に存在しない対象を指す(2)は、文脈から判断し直前のa new roommateを指すため文脈指示用法として知られている。

- (2) I've got a new roommate. I'll ask this guy if he'd be interested in buying your heap. (Oshima & McCready 2017 : 822)

どちらの用法にせよ、指示詞は発話場面に依存するダイクシスの側面¹を持つ表現であり、指示詞の存在により何を指しているのか容易に判断できる。ところが(3)のやりとりでは、文脈上一匹のラブラドルしか話題に上がっていないにもかかわらず、(3B)に複数の*Those Labradors*が用いられており、その指示対象が一見不明である。

- (3) A: My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B: Those Labradors are extremely loyal, you know.

(Bowdle & Ward 1995 : 34)

Bowdle & Ward(1995)によると(3B)の*Those Labradors*は、ラブラドルという犬種全般を総称的に指し示している例であるという。指示詞を伴う名詞句が総称的な解釈を受けるという事実は、一見したところ、特定の対象を直示的に指し示すという指示詞の機能と相反するように思われる。つまり、指示詞を用いて特定の対象を必ずしも指しているわけではなく、対象が具体的に何をど

ここまで含むのか明確でない。

本稿では、「名詞の指示の仕方」に目を向け、以下に掲げる問い：

(a) 指示詞は何を指し示しているのか。

(b) 指示名詞句（以降、指示NP）が総称的振る舞いを見せる要因は何か。

に答えるとともに、先行文献が抱えた問題の明確化及び再検討を目的とする。指示詞研究といえば、指示詞自体に焦点を当てたものが多いと感じられるが、それに付随する名詞を含んだ考察はあまりなされていないとは言えない。本稿では主に英語の言語現象を対象とし、指示NP全体の振る舞いに着目して議論を進める。通常、指示詞文の判断基準においては重要である、会話参加者との遠近による区別については取り上げない。

2. 総称文とその形式

総称文とは、特定の対象ではなく当該の対象に属するものをまとめて指す文をいう。(4)を例に発話者の立ち位置を確認しよう。(4a)は目の前で泳いでいる、現場に存在するビーバーについての発話であると解釈でき、総称文ではない。一方(4b)は、現場に存在するか否かに関係なく、ビーバーの特徴や性質について述べていることから総称文であると言える。

(4) a. Beavers are swimming in the lake.

b. Beavers build dams.

(Perlmutter 1970 : 239)

総称文であるか否かは、対象となるものが特定されているか、そうでないかによって判断でき、前者は総称文ではなく後者は総称文である。また、総称文は一般に、Carlson(1977)の概念に基づき大きく二つに分類される。まず、(5)は対象であるビーバーを個体として考えた場合にも通用する個体レベル(object-level)の例文である。

(5) 個体レベル (object-level)

a. Beavers build dams.

b. The beaver builds dams.

c. A beaver builds dams.

d. The beavers build dams.

(Perlmutter 1970 : 239)

(5)はビーバーの一般的・代表的な性質を表し、一匹ずつ個体のレベルで捉えることができる。(5a-c)の場合、総称解釈ができ(5d)の場合にはできない。つまり、総称解釈ができる文は、(5a)の裸複数名詞、(5b)の定冠詞＋単数形、(5c)の不定冠詞＋単数形といった3種類が通常である。(5d)の定冠詞＋複数形では、対象が特定されてしまい、ビーバーを総称的には捉えることはできない。

次に(6)は、個体としてではなく、種ごとに対象を捉える種レベル(kind-level)である。つまり、一匹の個体としてのビーバーではなく、ビーバーという種を一まとまりとして捉えている。したがって、種全体に影響を及ぼす表現である。(5c)では許容された不定冠詞との共起が(6c)では許容されないという点に注意したい。

(6) 種レベル (kind-level)

- a. Beavers are increasing in numbers.
- b. The beaver is increasing in numbers.
- c. *A beaver is increasing in numbers.

(Perlmutter 1970 : 240-241)

3. 先行研究と問題点

3.1. 指示詞の用法

前述のとおり、指示詞の用法は大きく分けると発話の場に物理的に存在する対象を指す物理的指示用法と、文脈内に存在する対象を指す文脈指示用法の二つに分けられる。以上に加えて、話し手の感情関与が含意される用法として、感情的ダイクシス(emotional deixis)²が独立した用法であると提案する研究も存在する(Lakoff 1974, Potts & Schwarz 2010, 岩澤 2007等)。岩澤(2007: 52)によると、感情的ダイクシスは「当面の話題になっていない事柄を漠然と示したり、それを談話内にあらたに提示したりするはたらきをもつ。」と述べている。例えば、次の(7a)はFred Snooksに対して、(7b)は嗅覚で捉えられた対象への嫌悪感に対して、指示詞を用いて感情的に強調している例である。

- (7) a. This Fred Snooks turns out to have 24 cats. (岩澤 2007 : 51)
- b. Sniff! Sniff! What's that disgusting odour? (新村 2006 : 39)

本稿では、話し手の感情を含む指示NPについて詳しく言及しないが、指示詞の用法として独立したものだとは考えない。「感情的ダイクシス」も物理的も

しくは文脈的に何かを指しているという点で、これらの用法に包含できると考えられるためである。加えて、指示NPにおける総称解釈の可能性を検討し、指示対象が何であるのかを考察するという本稿の目的に照らすと、指示詞の用法を過度に細分化することで、本来の目的から逸れるためである。しかし、指示詞と固有名詞が共起するケースに関しては指示NPの総称化現象との関連性が示唆されるため、第4節にて再度言及することにする。

3.2. Bowdle & Ward (1995) の総称的指示詞と諸問題

指示NPの総称化現象に関する理論的関心は、Bowdle & Ward (1995) が言及した総称的指示詞 (generic demonstratives) が根底にある。指示詞と総称文はそれぞれ、日常的な会話で頻繁に使用され、幼児に容易に習得される (Diessel 2006, Pérez-Leroux 2016)。そのため何ら難しさが感じられず、見過ごされやすい言語表現に思われるかもしれない。しかし、発話場面に依存し、特定された対象を指す機能を持つ指示詞が、発話場面に関係なく使用される総称文であるかのように振る舞うという言語事実には何らかの説明が必要であろう。

次の (8) は犬種の一つであるラブラドルを総称的に指す解釈ができるということを示している。

(8) Those Labradors are extremely loyal, you know. = (3B)

まず注目すべきは、(8) は日本語の直訳「あれらのラブラドルは本当に忠実だ」のように、物理的もしくは文脈中に存在する特定の対象を指さない場合にも可能だという点である。さらにthoseが定表現であるにもかかわらず、複数形のLabradorsとの共起が許容されている。(5d) で示したように、英語では定冠詞+複数形に総称解釈はない。このことから、定表現であるthoseを用いた総称解釈は例外であると言える。

(8) がラブラドルという犬種全体を指している総称的指示詞である一方、(9b) は、総称的に捉えるには不自然な例文である。比較しやすいように (8) を (9a) として再掲する。

(9) a. Those Labradors are extremely loyal, you know. = (3B)

b. #Those Labradors were first bred in Newfoundland, you know.

(Bowdle & Ward 1995 : 34)

Bowdle & Ward (1995) の総称的指示詞に関する指摘について順を追って概観

する。第一の指摘は、「述部が評価的 (evaluative) であるか否か」である。(9a) については「忠実である」のように、述部は評価であると捉えることができ、(9b) は「Newfoundlandで発祥した」といった単なる事実として捉えることができる。同様の議論はPotts & Schwarz(2010) でも提示されており、(10) はBowdle & Ward(1995) の主張の正当性を裏付けている。

(10) #These IBM ThinkPads have plastic cases! (Potts & Schwarz 2010 : 5)

(10) の例文「IBM ThinkPadにプラスチックケースがある」は、事実であり評価的とは捉えられず、総称的に捉えるには不自然だからである。Bowdle & Ward(1995) は、このように総称的指示詞の述部は評価的であるとし、事実を述べている文では成立しないという特徴を述べた。

第二の指摘として「共有知識の有無」があげられる。指示詞と共有知識 (shared knowledge) についての研究は多くなされてきた (Fillmore 1997, Oshima & McCready 2017等)。Potts & Schwarz(2010) は、(11) の例における指示NPが不自然となるのは、ThinkPadに関する知識が発話参加者間で共有されていないからであると指摘している。

(11) A: What is ThinkPad?

B: (#These) ThinkPads are amazing new laptop computers!

(Potts & Schwarz 2010 : 5)

この会話において、当然 (11B) はThinkPadに関する知識を有しているのだが、一方の知識だけでは指示NPは認可されず、対象に対する共通した認識があるか否かが重要な条件であるとPotts & Schwarz(2010) は論じている。このように発話参加者間で対象への共有知識がない場合には総称的指示詞は成立しない。

第三の指摘は、「選好される名詞の特徴」にある。(12B) は、前述のとおり「ラブラドル (というの) はいいペットである」とラブラドルを評価した文として解釈できる。

(12) A: My roommate just bought a Labrador.

B: Those Labradors make great pets.

(Bowdle & Ward 1995 : 35)

次に、(12B) の指示NPを (13B) のように*Those Labradors*から*Those dogs*に

変えた例文ではどうだろう。「犬(というの)はいいペットである」という文は、述部を評価的に捉えることができる。しかし、指示NPの名詞を変えることで、一変して総称的指示詞が成立しない。

(13) A: My roommate just bought a dog.

B: #Those dogs make great pets.

(Bowdle & Ward 1995 : 34)

Bowdle & Ward(1995) が注目した名詞の分類方法では、Rosch(1978/1999)の民俗分類(folk taxonomy)が採用されており、それを表1に示す。分類レベルは三段階に分かれており、Superordinate → Basic level → Subordinate の順に、その語が指示し得る対象の集合は小さくなり、同種の集合体でまとまるという特徴を持っている。

表1：Rosch (1978/1999 : 193) の民俗分類

Examples of taxonomies used in basic object research

Superordinate	Basic Level	Subordinate
Furniture	Chair	Kitchen chair
		Living-room chair
	Table	Kitchen table
		Dining-room table
	Lamp	Floor lamp
		Desk lamp
Tree	Oak	White oak
		Red oak
	Maple	Silver maple
		Sugar maple
	Birch	River birch
		White birch

表1から判断すると、LabradorsはSubordinateに属し、dogsはBasic levelに属することから、Bowdle & Ward(1995) によって指摘された総称的指示詞に選好される名詞の特徴は、その名詞が示す対象がSubordinateに属していなければならないと考えられる。(14) ではそれが顕著に見て取れる。

(14) a. Those Labradors make great pets. = (12B)

b. #Those dogs make great pets. = (13B)

(Bowdle & Ward 1995 : 34-35)

さらに、Bowdle & Ward (1995) では、Subordinateに属すことに加えて、視覚的に同一 (all alike) である必要性を述べ、dogsでは犬種ごとに外見上の特徴が異なるため総称解釈を許容しないと論じている。

総称的指示詞の成立条件について三つの指摘を概観したが、総称解釈を可能にする指示詞は次の(15)にまとめられる。

(15) Bowdle & Wardの指摘：総称的指示詞の成立条件

- a. 総称的指示詞の述部は評価的である。
- b. 発話参加者に対象への知識がない、対象に関するその他の知識を持たないという場合には成立しない。
- c. 名詞は、分類が下位であればあるほど選好され、視覚的同一性が見られる。その名詞の多くがSubordinateに属する。

ここからは、(15) に提示した条件を踏まえ、その諸問題について順を追って検討する。まず、共起する名詞の分類基準についてである。確かに、指示NPの名詞をLabradorsからdogsに変えると一変して総称的指示詞が成立しないというのは重要な指摘と言える。しかし、Basic levelに属する名詞が総称解釈をする(16)をどのように説明すればよいだろうか。

(16) Those porcupines are very territorial. (Bowdle & Ward 1995 : 37)

分類的には、animal → porcupines(ヤマアラシ) という階層順でありBasic levelと言えないだろうか。つまり、民俗分類では理論の妥当性が保てない場合が存在してしまう。こういった現象に対して、Bowdle & Ward(1995) では前述したように、視覚的に姿・形の統一が見受けられることが判断基準であると述べている。しかし、形質の類似性に対して、明確な定義を示すことは容易ではなく、名詞の分類方法が不明瞭になることを避けられない。

第二の問題点として、許容される述語クラスが判然としないことがあげられる。第2節において、典型的な総称文の二つの述語クラスとして「個体レベル」と「種レベル」を区別し提示したが、Bowdle & Ward(1995) が提示している例文には、「種レベル」の述語における指示NPの検討がなされていない。総称的指示詞を総称文の一種として検討するのであれば、指示NPの総称化現象に述語クラスが影響するか否かを指摘する価値があるだろう。二つの述語クラスにおける指示NPの総称化を示す例として(17)を提示する。(17B₁)は個体レベルの述語、(17B₂)は種レベルの述語である。

(17) A: My cousin just returned from Canada with a rare type of Labrador retriever puppy.

B₁: Those Labradors are extremely loyal, you know. = (3B)

B₂: Those Labradors are going to be extinct in as little as 50 years.

英語母語話者の意見を参考にすると、(17B₁)、(17B₂) の指示NPが総称化されているとは断言できないという。その要因は、指示NPの名詞が「ラブラドル全般」を指しているのか、「珍しいタイプのラブラドル」を指しているのか曖昧だからである。つまり、後者のように形容詞 *rare* による制限がかかった解釈をすることで、対象が総称化され、文全体を総称的に捉えているかのような印象を与えるのだと思われる。(17) のやりとりにおいて、こうした解釈の曖昧さが (17B₁)、(17B₂) とともに生じるものの、両者とも総称解釈をし得ることから、述語クラスの違いは、総称化現象とは無関係である可能性が高いと結論づける。しかし、先行文脈を考慮する必要性に注目すると、当該の指示詞がどの対象を指しているのか以前に、指示NPの名詞は何を指し示され得るのかを明確にする必要がある。次に示す (18) も (17) と類似した曖昧さを与える。

(18) These Spaniels make great pets.

(Doran & Ward 2019 : 245)

(18) の解釈は、Doran & Ward (2019) では、指示NPの *These Spaniels* は下位種にあたる種を指しているといい、English Springer Spaniel や Cocker Spaniel が該当すると述べている。本稿では、このように当該の指示NPのさらに下位種を指す指示詞を下位種指示と呼ぶことにする。

このように (17) にしても (18) にしても、指示NPの名詞のさらに下位に属する対象を指す場合があるという事実が議論を錯綜させる一要因であることを示している。つまり、ここで総称解釈と呼んでいる現象も、名詞の指示対象—例えばラブラドルやスパニエル—全体ではなく、さらにその下位種が先行文脈に存在しており、それを指しているだけなのではないか、したがって総称解釈の事例とはみなされないのではないか、という疑問が生じる。これらの問題点を踏まえ、次節では総称化現象のさらなる追究を試みる。

4. 総称効果を受ける指示NPの分析

本節では、指示詞が固有名詞と共起する事例に関して、総称化との関連性から検討する。まず、固有名詞とは、人や場所等に固有の名称を示し、唯一のな

ものであるため、不定冠詞との共起は一般に不可能であり、複数形にする必要性はない。また、特定の指示対象の名称を表しているため、その対象を定表現で改めて指示する必要もない。つまり、指示詞と固有名詞は原則として共起しないと云える。ところが、(19) に示すように固有名詞との共起が許容される指示詞は存在する。

(19) This Fred Snooks turns out to have 24 cats. = (7a)

この形式こそ、指示NPの総称化現象を解き明かすかぎとなるものである。その根拠として次の(20)に示される指示NPに注目したい。

(20) a. That Ben & Jerry's ice cream is a real crowd pleaser.

(Bowdle & Ward 1995 : 38)

b. Those IBM ThinkPads are quite popular.

c. That IBM ThinkPad is quite popular.

(Bowdle & Ward 1995 : 33)

(20) は、どれも Rosch(1978/1999) の分析に従うと subordinate に属され、総称解釈は成立し得る。(20a) はアイスクリームの種類として、Ben & Jerry's ice cream を総称的に捉え、(20b)、(20c) はそれぞれ、ThinkPad の種類として複数形と単数形の IBM ThinkPad を総称的に捉えることができる例である。Bowdle & Ward(1995) によると、複数形と単数形の両者が可能になる総称的指示詞と、単数形を許容しない場合があり、前者の場合には複数形と単数形の差がないと述べている。両者が可能になる場合とは、機能的に区別がつかない (functionally indistinguishable) もの、つまり IBM ThinkPad のように機能差がないように思われる場合には単数形を用いることができるというわけである。³ (20a) に that が使われている要因は、Ben & Jerry をアイスクリームのブランドの一つである固有名詞として捉えたと、複数形にする必要がないからと云える。

しかし (19) の指示NPは、This Fred Snooks が人名であることから、その唯一性が保たれている固有名詞と言えるだろうが、(20a-c) で用いられている名詞は固有名詞と言えるのかという疑問が生じる。混乱が生じる原因は、Ben & Jerry's や IBM (ThinkPad) のような名詞の複雑さにある。これらをブランド名として捉えれば、ブランドとは一般的に世界に一つしかなく、唯一性が保たれていると考えられる。しかし (20a-c) の名詞は、固有名詞的側面を持ちながら、普通名詞的側面も持ち、話し手及び発話参加者の対象の捉え方によっては、唯

一性が保たれない場合がある。

整理するために、Fordという一つの名詞が、それぞれ異なる意味合いを持つ例文(21)を示す。(21a)はFordというブランド名、(21b)は不定冠詞との共起からもわかるように、このブランドの製品を指した普通名詞として捉えることができる。(21c)は人名、(21d)は会社名である。

- (21) a. Ford is a familiar brand.
 b. Jane bought a Ford yesterday.
 c. Ford founded a car industry.
 d. Ford is an American car company.

(Langendonck & Velde 2016 : 35)

このように一つの名詞が、それぞれ異なる意味合いを持つことで、複数の商品を指すことができ、指示対象よりも広範囲を示す場合があると言える。このような、一部の名詞が持つ固有名詞と普通名詞の二面性こそが指示NPの総称化に繋がっているのではないか。総称効果を受ける名詞の特徴を仮説として(22)に示す。

(22) 総称効果を受ける名詞の特徴 (仮説) :

- a. 固有名詞的及び普通名詞的の両側面を持つ中間的な名詞である。
 b. 名詞が人工的であれば下位種指示が生じやすい。

(22a)については、車種であるFordのようにブランド名として捉えられる一方で、大量生産されている製品として普通名詞としても捉えられる二面性のある名詞を含む指示NPが、総称解釈を受けることを意味している。この仮説を立てることで、選好される名詞を定義づけることができ、また、固有名詞と共起する指示NPと総称解釈の関連性についての追究に繋がる。さらに、ブランド名や製品名以外の名詞についての位置づけの手がかりを提供することにも繋がると言える。例えば、前節までに示してきた、ラブラドルやスパニエルは、犬種であることから一種の「ブランド」と捉えることが可能になる。そのように捉えれば、こういったタイプの名詞を持つ二面性によって総称的解釈が可能になることを説明できる。

(22b)の「名詞が人工的であれば下位種指示が生じやすい」については、対象が人工的である場合、機種名や車種名またはそのモデル等の下位分類の存在が容易に想像でき、例えば、先行文脈でブランド名を提示することで、そのブ

ランドの一商品である何かが当該の文で指示NPとして示される。これは、それぞれの集合に属する対象は、同じ名称を持ちながら複数存在すると判断できるため、当該のNPでブランド名を提示することで、そのブランドの商品を総称的に指せるという仕組みである。

この仮説(22b)を検証するため、英語母語話者を対象に次のような調査をおこなった。固有名詞及びその下位分類としての製品やブランドにあたる名詞を含む文を作成し、その文の容認可能性を判断してもらい、さらに、容認可能な文については、当該の指示NPが何を指示しているかを聞き取った。その際に使用したのは、車種(Mercedes-Benz, BMW)や機種(Apple, IBM ThinkPad)である。この中のいくつかを例として提示する。まず、(23)はAppleを使用した例文である。

- (23) A: Did you see the new Apple commercial?
 B: Those Apple products are pretty popular.

(23)の先行文、Appleはブランド名として、次のように解釈できる。「Apple(という会社)の新しいコマーシャル」。対象文では、コマーシャルで流れていたApple製品のみを指すこともできれば、コマーシャルでは流れていないが、その他のApple製品も含めて、Appleから製造される他の製品を含み「Apple製品は人気である。」と総称化されている。

ブランド名と捉えられる先行文のAppleは、固有名詞的要素が強く感じられるが、対する答えではAppleが製造した他の豊富な製品が含まれていると解釈でき、例えば、iPhoneやApple WatchやMacBook Airなどがあげられる。固有名詞的側面と普通名詞的側面があるという複雑さだけでなく、先行文脈とそれに続く対象文における名詞の種類が変わる場合があるという複雑さにも注意したい。

(24)は、Apple製品の一つであるiPhone 5についての例文であるが、一変して指示詞を用いると総称解釈がしがたいという結果が得られた。

- (24) A: I don't see iPhone 5s these days.
 B: #Those iPhone 5s have been decreasing in the past few years.

iPhone 5はRosch(1978/1999)の分類に従えば、Subordinateすなわち、Apple(製品)の下位種として位置づけられるはずであるが、総称解釈を許容しない。つまり、Bowdle & Ward(1995)が主張するように、下位に属する名詞であれば何でも

総称解釈が生じるというわけではないという主張は妥当である。

なぜ、(23B) の *Those Apple products* が総称解釈を可能にし、(24B) の *Those iPhone 5s* では可能にならないのかについては、次のように考えることができる。製品としてのAppleはiPhoneやMacBook、Apple Watch、iPad等の豊富な種類が想定できるが、iPhone 5はApple製品が販売しているiPhoneの一モデルであり、モデルとしては一つしかないため、普通名詞的側面が弱い。しかし、このように商品モデルを意味する場合に総称解釈が可能となる場合も存在し、(25) はその例である。

(25) A₁: I am thinking about buying a new Mercedes-Benz.

B₁: What kind?

A₂: M model!

B₂: Those Benzes can be expensive.

(25) は、先行文脈において、ベンツの種類について言及しているために、(25B₂) の *Those Benzes* は、ベンツの豊富な種類すべてを総称的に指しているというよりも、ベンツの中でもM modelを指していると判断できる。つまり、下位種指示と解釈でき、先行文脈で述べられたM modelと捉えれば、対象を特定するはたらきのある指示詞が文脈指示用法として機能していると考えのが妥当である。これらの分析から、特徴(22b)に該当する名詞は下位種として捉えることで総称化すると言える。

製品やブランドにあたる名詞が、総称的に機能する場合を○に、そうでない場合を×として、まとめると表2のように示すことができる。

表2：名詞の総称化（製品名・ブランド名）

	指示NP	総称解釈	指示NP	総称解釈
①	smartphone	×	car	×
②	Apple	○	Mercedes-Benz	○
③	iPhone 5	×	M model	×

AppleとMercedes-Benzを例にとると、同程度の容認度が得られたと言える。両者とも、二面性を持つ中間的な名詞（表2のグレー部分）では、総称解釈を許容し、そうではない名詞の場合は、下位種指示を許容したとしても、総称効果を受けないという結果を得た。これらの結果から、基準の一つ目である(22a)の妥当性も確認され、二面性のある中間的な名詞により、指示NPの総称解釈

を可能にしていると言えるだろう。

さらにこの結果は、前節までに見てきた、動物種にも一般化できる。(26a, b) は、総称解釈が可能になる例文である。

- (26) a. Those white tigers are in danger of becoming extinct.
 b. Those Labradors are extremely loyal, you know. = (3B)

(26a) の *Those white tigers*、(26b) の *Those Labradors* は両者ともブランド名と同じようなはたらきをするということである。言い換えれば、ブランド名や製品名同様に、二面性のある名詞として捉えられるというわけである。ホワイトタイガーは、言わば虎の中の「ブランド」であり、ラブラドルは犬種の一つとして、「ブランド」であると考えられる。表2同様に、表3として示すことができる。

表3：名詞の総称化（動物）

	指示NP	総称解釈
①	dog	×
②	Labrador	○
③	犬の名前（固有名）	×

このように考えると、ラブラドルやAppleのようなある特定の「ブランド」に属する対象は、Bowdle & Ward (1995) の分析では、Subordinateに分類される下位種としていたが、本分析で示しているように二面性のある名詞ということもできる。後者の解釈は、Bowdle & Ward (1995) の分析において、不明瞭であった次の (27) を説明できる。

- (27) Those porcupines are very territorial. = (16)

Subordinateであるか否かにかかわらずporcupinesは、LabradorsやAppleと同様に「ブランド」として捉えられると言える。さらに、視覚的同一性についても同じ「ブランド」の一つであるとすれば、同一の集合がそろうことは当然のことと言える。このように考えれば、dogsでは総称解釈を許容しないが、Labradorsでは許容するという例文 (14) も納得がいく。

5. おわりに

本稿では、Rosch(1978/1999:193)に基づいたBowdle & Ward(1995)の指摘を踏まえ、名詞の分類方法の再検討を試みた。考察の結果、(28)を結論とする。

- (28) a. 固有名詞的側面と普通名詞的側面の二面性を持つ名詞には、指示範囲を曖昧にするはたらきがある。
 b. a.で記したはたらきが、指示NPに総称効果を与える。
 c. 指示NPの名詞が人工的であれば、総称化されにくい。

本稿では、「名詞の指示の仕方」について検討し、研究範囲が指示詞自体にとどまらず、名詞にまで及ぶという新たな枠組みを示した。さらに、ここでは英語に主軸を置いたが、他言語における指示詞研究の触発が期待され、今後の研究にいくつかの方向性を提供している。

本稿で記した内容は検証段階にあるが、特定の対象を直示的に指し示す指示詞と当該の対象に属するすべてを指す総称文のように、一見、関連性が見られない言語現象との間に繋がりを見出すことで、今後の指示詞研究に指針を示したことになった。また、「ものを指す」という、生活上、必要不可欠な行為の中には、思っているより奥が深く複雑な問題がひそんでいることを提示できたのではないか。

注

1. Fillmore(1997:61)は、“Deixis is the name given to those formal properties of utterances which are determined by, and which are interpreted by knowing, certain aspects of the communication act in which the utterances in question can play a role.”と述べている。例えば、人称を表すI, you、場所を表すthis, that, here, there、時間を表すnow等がそれに該当する。
2. affective (Potts & Schwarz 2010参照)と表記されることもある。
3. Bowdle & Ward(1995:38)は、“In contrast to plural demonstrative generic, whose felicitous use requires that the kind in question be relatively homogenous, singular demonstrative generics involving count nouns further require that the individual exemplars of the evoked kind are conceptually identical or functionally indistinguishable.”と述べ、次の(i)、(ii)は単数形を使用するのは、不自然だとしている。

- (i) #That laptop computer is pretty versatile.
- (ii) #That Siamese cat is pretty destructive.

(i) はlaptop computerには、種類がいくつかあり、機種やブランドによって、機能差があるため、(ii) は動物であるcatは、機械類と比べて、機能差の判断がつかないため、単数形を用いた総称的指示詞は不自然であると論じている。

*本稿は、松尾(2021)に修正・加筆したものである。詳細で貴重なご助言をくださった実践女子大学の猪熊作巳先生と村上まどか先生に心より感謝申し上げます。英語話者による文法性の判断は同大学Ricky Chi Yan Leung先生によるものであり、ご協力に感謝申し上げます。

参考文献

- Bowdle, Brian F. and Gregory Ward (1995) "Generic demonstratives," *Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 32-43, Berkeley Linguistics Society.
- Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to Kinds in English*, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Diessel, Holger (2006) "Demonstratives, joint attention, and the evolution of grammar," *Cognitive Linguistics* 17, 463-489.
- Doran, Ryan B. and Gregory Ward (2019) "A taxonomy of uses of demonstratives," *The Oxford Handbook of Reference*, ed. by Janette Gundel and Barbara Abbott, 254-257, Oxford University Press, Oxford.
- Fillmore, Charles J. (1997) *Lectures on Deixis*, CSLI Publications, Stanford, CA.
- 岩澤勝彦 (2007)「感情的ダイクシスと指示性」溝越彰・小野塚裕視・藤本滋之・加賀信広・西原俊明・近藤真・浜崎通世(編)『英語と文法と一鈴木栄一教授還暦記念論文集一』51-62, 開拓社.
- Lakoff, Robin (1974) "Remarks on 'this' and 'that'," *Papers from the 10th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, 345-356.
- Langendonck, Willy van and Mark van de Velde (2016) "Names and grammar," *The Oxford Handbook of Names and Naming*, ed. by Carole Hough, 17-39, Oxford University Press, Oxford.
- 松尾夏海 (2021)「指示詞を用いた総称解釈—その実態について—」実践女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士論文.
- 新村朋美 (2006)「日本語と英語の空間意識の違い」『月刊言語』35-5, 35-43.
- Oshima, David Y. and Eric McCready (2017) "Anaphoric demonstratives and mutual

- knowledge — The cases of Japanese and English,” *Natural Language & Linguistic Theory* 35, 801-837.
- Perlmutter, David M. (1970) “On the article in English,” *Progress in Linguistics: Collection of Papers*, selected and edited by Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph, 233-248, Mouton, The Hague.
- Pérez-Leroux, Ana T. (2016) “The expression of genericity in child language,” *The Oxford Handbook of Developmental Linguistics*, ed. by Jeffrey Lidz, William Snyder and Joe Pater, 565-586, Oxford University Press, Oxford.
- Potts, Christopher and Florian Schwarz (2010) “Affective ‘this’,” *Linguistic Issues in Language Technology* 3, 1-32.
- Rosch, Eleanor (1978) “Principles of categorization,” *Cognition and Categorization*, ed. by Eleanor Rosch and Barbara B. Lloyd, 27-48, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, New Jersey. Reprinted in Eric Margolis and Stephen Laurence (eds.) (1999) *Concepts: Core Readings*, 189-206, MIT Press, Cambridge, MA.